
2 . ハプスブルグの都

フランシス・ローレライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2・ハプスブルグの都

【Nコード】

N0765T

【作者名】

フランシス・ローレライ

【あらすじ】

ウィーンで初デート。津軽マミの案内役は、国谷イサムだ。

約束の日は晴れていたが冷え込みが厳しく、イサムが家から外に出ると、まるで獲物を瞬時に冷凍してしまう、巨大な冷凍庫に迷い込んだようだった。

帽子の店は、町のおへそとも言わべきシュテファン広場から伸びる、シンガー・シュトラッセ（シンガー通り）沿いにあった。

彼は早めに到着し、帽子屋さんの大きな窓ガラスから中を覗き込んだが、津軽マミは来ていなかった。

そこで彼は寒さを凌ぐため、すぐ隣のデリカテッセンに入ることにした。ガラス・ケースの中で、トマトやピーマンなど、色とりどりのオリーブ油漬け野菜が自己主張しているので、ほっとするのである。

ここでは、冬場になると新鮮な生野菜が不足するので、とにかくイタリア産などに頼らざるを得ない。日本からも、果物などを輸入する余地はあるのだろうか、と考えてしまう彼だった。

しばらくしてその店を出ると、ちょうど帽子屋さんの前に彼女がいた。

「あつ、津軽さん！ 待たせちゃった？」と、白い雲を吐きながら、彼が声をかける。

彼女はグレーのコートに白いマフラー、そして茶色いニット帽から黒髪がはみ出て、胸のあたりまで。彼は、茶色いコートに黒いツバの革帽子だった。

「いいえ、こちらこそ……」と白く雲を吐きながら、彼女がにこやかに会釈した。ほっぺだが、少し赤い。

「寒いね！ 中に入ろう」

イサムがドアを開けると、チリン、と鈴が鳴った。

店のおばさんが顔をあげ、「来た、来た、新参者が」といった態度で二人を迎える。

周りには、きれいに棚が張り巡らせてあり、お客さんがしきりに帽子を選んでいた。

マミは、被っていた茶色いニット帽を手にしながら、

「これよりも厚手の、フカフカが欲しいんです。まだまだ雪、降りますよね」と、彼に言った。

そして取替え引換え、思いつくままに棚の帽子を被ってみる。店のおばさんも、にこやかに薦めてくれる。

彼女は迷いながら、お店の品物をしきりにチェックする。

「来年から、シリングがユーロに替わるんだよね」と、彼がつぶやいた。

「ちょっと高すぎるわ……どうしよう」

そこでイサムが店員に何やらささやいた。すると彼女がうなずき、何やら奥から出して来るではないか。

それは、白と茶色の暖かそうな毛皮の帽子だった。

「あつ、これ可愛い！」と、マミは歓声をあげながらそれを取り上げ、鏡の前で被ってみる。

「結構、似合うね」と、イサムが薦める。

彼女は値段を確認し、もう一度自分の姿を確認すると、迷うことなく決めてしまった。

店員が少し安心したような表情で、品物を包んでくれる。

「良かったね」

「うん。ほっとしたわ」

彼女は支払いを済ませ、品物を受け取ると、

「ダンケ・シエーン。アウフ・ヴィーターゼーン」と、嬉しそうに挨拶した。

「ビット・ゼア」と店員が答える。

お店のドアをイサムが開けると、チリンと鈴が鳴る。

「このドイツ語、変わっているでしょう？ 関西弁みたいに軟らかくて」

「そうね。『こんにちは』もグーテン・タークでなく、グリュス・

ゴットだし」

「ミュンヘンの方言に近いんだ」と言つて、イサムが地元民の常識を振りかざす。

彼女は外に出ると早速、新しい帽子を被つてみた。

「暖かい！」

そして彼らはシンガー通りを抜け、ようやくシュテファン広場に出てきた。

あの重々しいシュテファン寺院が、目の前に迫ってくる。

この教会は、高さが140メートル近くにもなるので、遠くからも見えるウィーン中心部の目印。二つの塔は、高さも形も不揃いだ。が、とても重厚な伽藍で、長い年月を物語る貫禄がある。

屋根には色鮮やかなモザイクが施されており、ハプスブルグ家の紋章である双頭の鷲が、大きく描かれている。

「コーヒーでも飲まない？」とイサムが彼女を誘う。

「そうね」と言いながら、彼女が手をすり合わせる。

二人は迷うことなく、広場のカフェ「アイダ」を目指した。東京で言えば、六本木の交差点にある「アマンド」くらいによく知られた店である。

中に入り、ほっと息をつく。二人は帽子や手袋をとり、コートを脱いだ。

彼女は、紺のジャケットに黒いスカート。格子縞の黄色いブラウスが襟を飾っている。

イサムはまるで儀式のように、コート類を入り口近くの洋服掛けまで持っていく。テーブルに帰ってきたところで、「どうも有難うと、彼女が迎えてくれた。

「ここでは防寒具の着脱が、風物詩なんだ……」と、彼が自嘲気味につぶやく。

「私、グリウンター（緑茶）にしようかな」と、彼女が言った。そう言えば隣のテーブルでも、グリウンターを飲んでいる。

「僕も、それにしよう」と言いながら、彼がウエイトレスを探す。

「お蔭様で、すてきな帽子が手に入ったわ」

「良かったね、気に入ったのがあって」

ようやくウエイトレスが来てくれたので、イサムが注文する。

左手の薬局の前には、モーツァルトの時代からタイムスリップしたような、派手な赤い上下をまとった若い男女がいて、ビールを配っていた。どうやら、ベルヴェデーレ宮殿で演奏会があるらしい。

二人とも昔風の短いズボン姿で、膝からは白い靴下。足もとははストローらしきものが置いてあるが、寒そうに手足をすり合わせている。

「本当は強いお酒が、一番温まるんだけどね……」と言いながら、イサムがほっと息をつく。

「国谷さんは、札幌の御出身？」

「そう」

「なら、寒さも、平気じゃないですか」

「いやあ、ここはずっと北で、大体サハリンの南くらい。だから、来た頃はとても寒くて……」と言って、彼が先輩面する。

「私は東京だから、とても無理……」

「津軽さんだと、青森とも関係あるの？」と、彼が探りを入れる。

「そうねえ…… ルーツには、それこそ恐山系もいたらしいけど……」
ウエイトレスが、緑茶を運んできてくれた。

「ダンケ……イタコさんのこと？」と、彼が話を続ける。

「んだ……」

「あつ、方言」

「んだ」

「御自身にも、霊能力とか？」と言いながら、彼がウィンクする。

「神頼みは、するが」と言って、彼女が笑みを浮かべる。

「怒らせると、怖いんだね、きつと……」

「んだよお！」と言って、彼女がおかしそうに笑った。

「そう言えばこれから、プロの楽団で弾くんでしたっけ？」

「アウガルテン管弦楽団って、御存知？」と答える彼女は、自信がなさそうだった。

「へえ……結構、有名」

「六月のオーデイション次第なの……」

「課題曲は？」

「パガニーニと……問題は、シューベルトなのよ」

「きつとうまく行くよ、ここで勉強すれば……シューベルトは、生粋のウィーンっ子なんだ」

二人はすっかり温まり、防寒具を再び身にまとうと、満足そうにカフェから外に出た。

そして、シュテファン広場を横切る。

白く、大きな記念碑が近づいてくる。てっぺんには、金の十字架。17世紀にペストの災厄が終わり、神への深い感謝を表したものだ。遠くから眺めると、まるで巨大なバナナ・アイスクリームのかたまりだ。

「英雄広場まで、行ってみようか」と、イサムが持ちかけた。

「ええ」

動いている間は、多少なりとも寒さを忘れることができる。二人の吐く息が白い。

道沿いには、たくさんのお土産屋さんや骨とう品のお店が並んでいる。この辺は観光名所がたくさんあり、イサムはツアー・ガイドよろしく彼女を案内していく。

二人が赤信号で立ち止まると、向こう側はホフブルグ宮だった。

「ウィーンは、パリの縮刷版のようだって言うわよね」とマミがコメントしたので、彼が解説を試みる。

「オーストリアのハプスブルグ王朝とフランスのブルボン王朝は、ライヴァルだったんだ。

マリア・テレジアって、いるよね？」

18世紀中頃の話だけど、ハプスブルグ家に男の世継がいなくなる。そこで例外的にマリア・テレジアが女性の君主になったら、とても見事な治世を築いて……その末の皇女マリー・アントワネットは、政略結婚でフランスのルイ16世に嫁いだけど、1789年にはパリで革命が勃発して、彼女は国王と共に、犠牲になってしまう」「知ってるわ」

「そこに彗星のごとくナポレオンが現れて、ヨーロッパ中が大戦争になるけど、ついには敗れてパリも陥落するんだ」

1814年に、あと片づけのために各国元首がウィーンに集まり、この王宮で寝泊りしたらしい」

「へえ……そんな時代に、タイムスリップしてるんだ」と、彼女が反応する。

信号が青になった。

「会議が踊つてた頃の町並みが、そのまま……」と言いながら、イサムは彼女を促し、道を渡りはじめる。

「その辺から、モーツァルトが出てきそうね……」

「ここはやっぱり、おヴィエンナ、ヴィエンナ・ランド……」と、彼がつぶやいた。

「国谷さんは、プロのガイドさん？」

「休日だけ。日系の商社で……」

「へえ、そうなんだ」

道を渡るとやがて、王宮へと続く大きなミハエル門が、壮麗な姿を現わす。全体的に白いが、ドーム屋根だけパステル調の青緑色をしている。

二人は、大きなトンネルのような長いアーチに入っていく。あたりが次第に暗くなり、空気がとてもひんやりする。

左手のお店では、繊細で色彩豊かな刺繍工芸「プチ・ポワン」がウィンドーを飾り、通りすがりの観光客を魅惑している。

そしてどこからともなく、パツコロ、パツコロと蹄の音が響いてくる。

そうこうするうちに、向こう側から光が差し込み、目の前に英雄広場が広がった。

そこは宮殿の広い前庭であり、そのまま公園に続いていた。何台もの二頭立て馬車がお客さんを待ち、たくさんのハトが地面をつついていた。

「開放されるわ！」と彼女が嬉しそうに言う。

「この辺は季節が良いと、一面の芝生でね。ところで、近くに御親戚とか知り合いとか、いないの？」と彼が尋ねてみた。

「ミュンヘンにすることは、いる。それに、マエストロ・フィツシユマンも……国谷さんは？」

「強いて言えば、ブン屋さんの萩谷君かな。彼とは、小学校が一緒でね……バツタリと遭遇したもんだよ……」

「おもしろい」

ホフブルグ宮殿の白く大きな建物は、底面が弧を描いた形をしている。左右対称な二段構えであり、下の階にはアーチ型の大きな窓が等間隔で並び、上の階にはギリシャ風の円柱がきれいに並んでいる。

建物の中央手前には、乗馬姿の將軍の、大きな銅像。

「誰だか、知っている？」と、イサムが口を開いた。

「オイゲン公？」と、彼女が自信なさそうに答える。

「そう。彼は負け知らずの將軍で、トルコやフランスと戦った御褒美が、ベルヴェデーレ宮殿……」

王宮の建物を見上げると、屋根の縁にはギリシャ・ローマの古典趣味の人物像が並び、中央つぺんには青空をバックに、ハプスブルグ家を象徴する双頭の鷲が大きく翼を広げていた。

「ここは彫像が多いわね。装飾もすごいし……」と彼女が言った。

「そう、装飾天国だね。何世紀も前から、設計士が観光客を意識していたみたいで……」

二人で王宮の中に入っていく。素晴らしく高い天井に、広々としたホール。階段のステアケースが壮麗で、念入りに彫刻や装飾が施

されている。全部、大理石の塊だ。美術品がたくさん置いてあり、まるで王朝時代の映画のセットのよう。

「地階が結構面白んだけど、行ってみる？」とイサムがいたずらっぽい表情で言った。

「……ええ」

「音楽家冥利に尽きるんだから……」と言いながらイサムが彼女を連れて地階に下りていく。

そこは、古楽器を展示する博物館だった。

階段を降りてすぐ入った部屋には、誰もいなかった。

そこかしこにガラス・ケースがおりてあり、年代物のヴァイオリンやチェンバロがディスプレイしてある。

「ほら、あれを見て」と言いながら、イサムが向かいの壁を指さす。彼女が目を向けると、黒い大蛇が幾重にも身をくねらせたような形の、珍しい吹奏楽器がかかっていた。

「あ、知ってる。サーパントでしょう？」

「そう。昔の、木のサクソフォン」

「どんな音色だったのかしら」と、彼女が尋ねた。

「それぞれは、男性的で……」

「へえ…… そうなんだ」

その瞬間、彼は思わず、津軽マミを抱き寄せ、頬にキスしてしまいたい衝動にかられた。

ところがどうも、人が階段を降りてくる気配がするのだ。

そこで彼は取り敢えず、彼女の手を取り、次の展示室に抜けていった。

まずは、セーフ。

地上階に戻り、彼女が言った。

「私、オーディション用の楽譜を買わないといけないの。この間、やっと曲目が発表されて……」

「それじゃあ、ドブリンガーにでも行こうか」と答えながら、イサ

ムが玄関の重い扉を開ける。

外の明るさに眼がくらむようだ。

二人は英雄広場を横切ると、狭い路地の中からドロテー通りを探し出す。

暫く歩いているうちに「ドブリンガー」の看板が見えてくる。

イサムがドアを開き、彼女が先に店に入っていく。ミュージック・ショップの中は、とても暖かい。

「ヴァイオリンの楽譜は、どこかしら」

その店はいくつかの部屋に分かれていた。彼女は、ヴァイオリンのコーナーに消えていく。イサムは、フルートの楽譜を見ながら時間をつぶすことにした。

ドビツシーとか、ラヴェルとか、フランスものが目に付く。

暫くすると、彼女が戻ってきた。何やら、不機嫌そう。

「在庫がなかったの……」

「シューベルトだよね？」

「そう。ソナチネの3番、ト短調。パガニーニの方は、あるの」

「へえ……注文した？」

「二週間かかるんですって」

「そのくらいは、しょうがないかも。楽譜の店は、ほかにもあるし……気分転換に、何か飲んでいかない？」と、彼が少し同情しながら言った。

「うん」

そこでイサムは彼女の手を引いて、通りの向かい側の、オープン・サンドの店に入ることにした。二人で、カウンターの前の列に並ぶ。「舞踏会の練習、結構大変だわね」と言って彼女は、アルテドナウ・アンサンブルの話に戻る。

「大丈夫、じきに慣れるから」

「国谷さんの隣で、ファーストを吹いているのは、誰？」

「彼は韓国人のハロルド・チュン。IAEAの職員で……」

「へえ……そうなんだ。彼って、ハンサム。私、カプチーノを飲む」

うかな」と言いながら、彼女が冷たい頬を手で覆う。

その後、二週間も経過しただろうか。

イサムは朝早くから、出かける仕度をしていた。

外に出ると異様に寒く、吐く息が白い霧になってしまふ。

5分も歩くと、地下鉄の入り口があった。

階段を下りたところで、機械に回数券を入れる。

カチャン。

上り下りする人はみな、エスカレーターの右側に立っている。

地下鉄では、みんな静かだった。観光客以外では、老人の姿が目立つ。

しばらくすると、シュテファン広場駅に到着。

地下鉄の広い階段をのぼると、目の前にシュテファン寺院がそびえている。すでに、たくさんのお客が集まっている。

空気が、とてもすがすがしい。

イサムは、石畳を歩き始めた。

10分も歩いただろうか。

教会が見えてきた。すぐそばには、エビヤスモークド・サーモンをオープン・サンドイッチで食べさせるお店。

出勤途上なので、時間があまりない。

彼はマミの住所を確認すると、そこに大きな郵便受けがあるのを見つけ、彼女の捜していたシューベルトの楽譜を投げ込んだ。

「ああ、良かった。これならオフィスにも、間に合うだろう」
始業は、8時半だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0765t/>

2 . ハプスブルグの都

2011年8月23日03時29分発行